東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
2019 年度フィールドネット・ラウンジ企画 セミナー

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa,
Tokyo University of Foreign Studies
Fieldnet Lounge Seminar 2019

学際的なフィールドワークから「描画」を考える

Re-Encountering “Drawing” through Multidisciplinary Fieldwork

報告書
Report

企画責任者：田暁潔（筑波大学体育系）

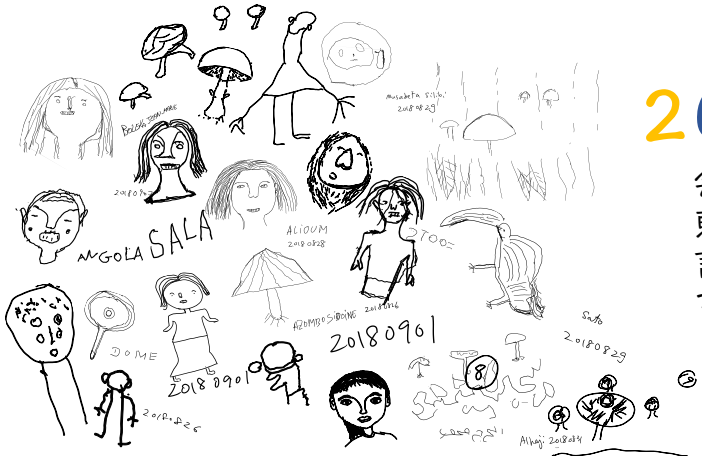
開催日時：2019 年 12 月 8 日（日）13:25〜18:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　マルチメディア室（304）

主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA 研)

科研費新学術領域研究 No.17H06342（研究代表者：高橋康介）と No.18H04192（研究代表者：田暁潔）「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現-」

2019年度フィールドネットラウンジ企画セミナー



2019.12.8 Sun

会場：
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所３階
マルチメディア会議室 (304)

事前登録不要
参加無料

学際的なフィールドワークから「描画」を考える

プログラム概要

13:25～13:55　オープンニング・セッション

13:25～13:30　吉田ゆか子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「オープニング」
13:30～13:55　高橋康介（中京大学心理学部）「顔身体学における描画フィールド実験」

13:55～15:35　フィールド描画報告・セッション

13:55～14:20　「ケニア・マサイを対象にした描画フィールド実験 」
田暁潔（筑波大学体育系）

14:20～14:45　「カメルーンにおける描画フィールド実験」
大石高典（東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター）

14:45～15:10　「タンザニアにおける描画フィールド実験」
島田将喜（帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科）

15:10～15:35　「東南アジアにおける描画フィールド実験」
錢琨（九州大学持続可能な社会のための決断科学センター）

15:50～16:45　コメント・セッション

15:50～16:10　コメンテーター研究紹介(1)　齋藤亜矢（京都造形芸術大学文明哲学研究所）
16:10～16:30　コメンテーター研究紹介(2)　山本美希（筑波大学芸術系）
16:30～16:45　アドバイザのコメント　亀井伸孝（愛知県立大学外国語学部）

17:00～18:00　総合討論

[お問い合わせ]：田暁潔（xiaojie.tian2013@gmail.com）

【共催】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)
科研費新学術領域研究No.17H06342、No.18H04192
「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築―多文化をつなぐ顔と身体表現」

FACE & BODY

目次

当日プログラム 3

趣旨 5

実施報告：発表内容 6

１．全体紹介 6
２．事例報告 6
３．コメンテーター研究紹介 9
４．アドバイザーからのコメント 10

総括・今後の課題 11

企画の様子 13

当日プログラム

13:25-13:30	オープニング
	吉田 ゆか子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）
13:30-13:55	顔身体学における描画フィールド実験
	高橋康介（中京大学心理学部）
13:55-14:20	ケニア・マサイを対象にした描画フィールド実験
	田暁潔（筑波大学体育系）
14:20-14:45	カメルーンにおける描画フィールド実験
	大石高典（東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター）
14:45-15:10	タンザニアにおける描画フィールド実験
	島田将喜（帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科）
15:10-15:35	東南アジアにおける描画フィールド実験
	錢琨（九州大学持続可能な社会のための決断科学センター）
15:35-15:50	休憩
15:50-16:10	コメンテーター研究紹介(1)
	齋藤亜矢（京都造形芸術大学文明哲学研究所）
16:10-16:30	コメンテーター研究紹介(2)
	山本美希（筑波大学芸術系）
16:30-16:45	アドバイザのコメント
	亀井伸孝（愛知県立大学外国語学部）
16:45-17:00	休憩
17:00-18:00	総合討論

Program

13:25-13:30	Introduction
	Yukako Yoshida (The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA))
13:30-13:55	The Face-Body Studies and drawing experiment
	Kohske Takahashi (School of Psychology, Chukyo University)
13:55-14:20	Daily drawing and drawing experiment of Pastoralist Maasai in Kenya
	Xiaojie Tian (Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba)
14:20-14:45	Daily drawing and drawing experiment in Cameroon
	Takanori Oishi (African Studies Center, Tokyo University of Foreign Studies)
14:45-15:10	The drawing experiment in Tanzania
	Masaki Shimada (Faculty of Life & Environmental Science, Teikyo University of Science)
15:10-15:35	The drawing experiment in Southeast Asian countries
	Kun Qian (Institute of Decision Science for a Sustainable Society, Kyushu University)
15:35-15:50	Short Break
15:50-16:10	Research Introduction from Commentator (1)
	Aya Saito (Institute of Philosophy and Human Values, Kyoto University of Art & Design)
16:10-16:30	Research Introduction from Commentator (2)
	Miki Yamamoto (Faculty of Art and Design, University of Tsukuba)
16:30-16:45	Comments from Advisers
	Nobutaka Kamei (School of Foreign Studies, Aichi Prefectural University)
16:45-17:00	Short Break
17:00-18:00	Discussion & Closing

趣旨

砂地で枝を用いて動物を描く。身体に模様を刻んで飾る。鉛筆を持って自画像を描く。人間は生活の諸場面において、文字以外のかたちで描画し続けている。「描画」という現象は高い認知能力を持つヒトの特徴として、これまでに考古学を始め、文化人類学、認知科学、美学、芸術学、臨床心理学などの分野で考察が進められてきた。その多くは、「描画」を「進化」・「発達」と関連づけながら、人間の歴史や社会、認知能力、身体能力を、「イメージ」や「想像・創造力」、「装飾・自己表出」など、人間が持つ普遍的な側面から理解・解釈している（ルイス＝ウィリアムズ、2012；斎藤、2014）。

このように多分野でおこなわれてきた「描画」に関する調査において、研究者たちは、「描画」行為それ自体、あるいはその行為によって生まれる「作品」を、見る・聞く・感じる、すなわち五感を活用したフィールドワーク手法を用いて観察・記録してきた。考古学のように「行為のプロセス」を直接観察できない分野を除けば、多くの場合、実際に特定地域で発生している「描画」行為を対象にしてきた。

しかし、実際の研究のほとんどが地域性を持つ「行為的プロセス」より「できあがった作品」に重きを置いた。そのため、身分や近代教育の程度のような「描画」を実施する主体の社会的属性、描画主体どうしの交流や、描画主体と観察者の関わりなど描画行為が行なわれるのと同じ空間におけるアクター間の社会関係と相互行為についての説明が足りなかった。また、無文字社会、学校教育を推進する社会であるかどうかなどといった描画行為を成立させるための社会・経済・文化的なコンテキストについても十分に考慮されてこなかった。そのために、フィールド調査で得られるはずの、地域的・文化的な特徴を伴ったデータ収集ができたとしても、分析のプロセスにおいてはその多数が捨象（c.f. 尾見・伊藤, 2001）されることとなる。

だからこそ、それら「余分」とされてきたような情報を用いて「描画」現象を考察することは、「描画」に関わる新たな発見につながる可能性がある。

実験心理学と文化人類学を専門とする話題提供者らは、2017年から、文化的・地域的特徴を持つ人間の顔や身体を用いた「感情・表情」の認識と表現を理解するため、「描画」を用いたフィールド実験を複数のアジア・アフリカの諸国で実施してきた。その際に、「感情・表情」の表現と認識を普遍性と地域性の両方から再発見するため、「描画」行為について、「描画のプロセス」と「成果としての絵」の両方に注目したデータ収集をおこなってきた。本ワークショップは、心理学と人類学の分野に属す研究者らが実施した「描画」についてのフィールド実験のプロセスを紹介し、これまでに得られた成果と課題について報告する。また、フィールドワークから「描画行為」を理解し、そこからヒトの認識や表現の多様性を理解するための新たな可能性と研究方向を探りたい。

引用文献：

尾見康博、伊藤哲司編著（2001）「心理学におけるフィールド研究の現場」北大路書房.
斎藤亜矢（2014）「ヒトはなぜ絵を描くのか」岩波書店.
ルイス＝ウィリアムズ著、港千尋訳（2012）「洞窟のなかの心」講談社.

実施報告：発表内容

１．全体紹介

【顔身体学における描画フィールド実験】

高橋康介（中京大学心理学部）

科研費新学術「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築–多文化をつなぐ顔と身体表現（通称、顔身体学）」の紹介、及び顔身体学における描画フィールド実験の意義や実施状況、成果についての紹介を行った。現代では文化的境界を越えて人々が往来し、さまざまなコミュニケーションが生まれる。他者、特に自己とは異なる集団に属する他者とのコミュニケーションを円滑に行うためには、そのような他者の認識の枠組みを理解することが必要である。描画フィールド実験では、描画物には描画者の認識の有様が反映されうるという仮定の上で、さまざまな地域・文化において顔や身体を描画する課題を実施してきた。そこでは当初予想していなかった文化的地域的多様性が確認されている。一例を上げれば、顔描画において描画されるパーツは様々であるが、東洋や西洋とは異なりアフリカ諸地域の描画物には眉弓鼻梁線が頻出する。また顔を構成する主要なパーツは目と口であるという暗黙の了解が存在するが、実はこの原則はユニバーサルではないという可能性が示されつつある。以上の研究紹介を踏まえ、描画フィールド実験がもつ可能性について議論にした。

２．事例報告

【ケニア・マサイの描画行為と描画フィールド実験】

田暁潔（筑波大学体育系）

2018 年 11 月、ケニアの牧畜民マサイを対象にした描画フィールド実験を、74 名のマサイに対して実施した。実験に用いた顔写真を見た一部の参加者は、描く前に人物の背景や名前、職業などについて聞いた。また、全身を描く者や、内臓を描く者、さらには顔の輪郭の外に口や目を描く者もおり、発表者が想定したものとは異なる描画プロセスを見せた。この実験における観察からは、人類共通とされてきた描画行為についての私たちの理解は、かなり限られたものであることがわかった。今回の発表は、これまでのフィールド調査から観察されている子どもの遊びと生業活動についての描画行為を、その背景と環境、描画のプロセスに着目して報告したものである。口承文化を主とする牧畜民マサイ社会におい

て、筆やペン、紙などの道具を利用した描画行為は、学校教育の経験を持つ 30 代以下の若者世代に限られて見られる。一方、実際の日常生活のなかでは、多種多様な絵解き行動と描画行為が行われており、家畜管理や、子どもの遊びなどの場面でよく観察される。発表の中では、家畜の模様や色の特徴を細かく観察し、家畜の体の焼印を描く行為や、地面にある野生動物の足跡から行動を読み取り、手足を用いてそれらの足跡を描き出す遊びなどについて報告し、マサイにとっての描画行為がいかなるものなのかを文化集団における描画の意味に着目して議論した。

【カメルーンにおける描画フィールド実験】

大石高典（東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター）

大石が人類学的調査を継続している中部アフリカ・カメルーン東南部の熱帯林地域では、描画の実践は特に珍しいものではない。発表の冒頭で、スケッチを描いたり描かれることが、生態人類学的な生業研究や語彙調査票を用いた言語調査のなかで、語彙の示す身体部位やモノ、空間の範囲、動物や魚類の民族分類について教示を受けたり確認をしあうことでコミュニケーションをしてきた経験が共有された。さらに、ただ、具体的な知識を分かち合うだけでなく、調査者が、調査地で人々が自由に書き残していく描画作品に触発されることから研究テーマや課題が新たに立ち現れてくることについても触れられた。亀井（2010：補章）が論じるように、フィールドワーカーにとっては、描画はまず調査対象社会の人々との意思疎通や知識の共有を行なう上で有効なツールであり、さらに描画作品を鑑賞し合うこと自体が異文化接触の場として研究のシーズをもたらしてくれることもあるのである。カメルーンの調査地では、このような経験・文脈の上に付け加えられる形で、顔身体についての「フィールド実験」が行なわれた。その結果、人々は具象的な顔についてのイメージを持っており、極度に記号化された顔文字は生きている人間の顔として認識されづらいことが分かってきた。また、心理実験は人々の認識をどこかで分節し、枠に押し込めることでデータ化を行なうが、そこから漏れてしまう事例にこそ人々の顔身体知を解き明かすヒントがあるのではないかという問題意識が述べられた。

【タンザニアにおける描画フィールド実験】

島田将喜（帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科）

2017 年夏から、実験心理学者（高橋）と現地の被験者たちの間で「フィールド実験」が行われている。この実験自体のもつ特徴を、「実験室実験」や「お絵描き実験」に被験者として参与した経験と比較することで明らかにした。島田が毎年訪問するカトゥンビ村には、

焼畑農耕民トングウェの調査アシスタントたちが多く暮らしている。フィールド実験において統制困難な社会的・物理的環境あるいは要求特性などの結果への影響は大きかった。しかし実験室実験でもこれらの影響は無視できないことから、実験という営為自体が相互行為性を帯びていることが示唆された。お絵描きという実践もまた本来相互行為的であり、社会的遊びの側面がある。トングウェの治療儀礼では、呪医たちが地面に作画を行うが、その作画行為や生み出された絵、そして絵に物語を与える行為が、被治療者らの面前にさらされる。相互行為的に生み出される力は、多くの洞窟壁画や儀礼において、人の顔が表象的に「描かれない」理由の一つになっている可能性がある。実験に参与するという行為自体のもつ社会性、相互行為性を前提にするならば、実験者と被験者、あるいは被験者同士の関係、被験者の属性に目を向けることが、得られた結果の人類学的「理解」には必要である。

【東南アジアにおける描画フィールド実験】

錢琨（九州大学持続可能な社会のための決断科学センター）

2014 年 9 月に初めてカンボジアでのフィールドワークに参加し、実験心理学者の私にとって新しい世界が広がった。その後、主にカンボジア、インドネシア、ラオス、タイを中心とするフィールドワークに参加し、昆虫食の比較調査など、心理学的な研究を始めた。描画フィールド実験はタイで２回実施し、１回目は 2017 年 12 月にタイ東北部（イーサーン地区）で、２回目は 2019 年 8 月にタイ中部で行った。実験の結果として、タイの描画データの多様性が特に注目された。日本やフィンランドのようにシンプルなパターンで描く人もいれば、時間をかけて細部まで描く人もいた。タイでの調査は、特定のフィールドで実施する形ではなく、フィールドトリップで偶然に出会った人たちを対象に、村の住民から町の学生までとにかく無作為にサンプリングしたため、それが「多様性」の原因にも考えられる。タイの場合、宗教、文化、民族や伝統、教育など様々な面で多様的であるため、「タイの描画」として一括りしにくい部分がある。調査地域や調査協力者の年齢層をある程度特定すれば、多様性を収束させることも可能だが、その収束されたデータはどれほど「タイの描画」を代表できるかも疑問が残る。この問題はタイに限らず、他の調査地でも発生しうるため、今後の描画実験でも引き続き検討して行きたい。

３．コメンテーター研究紹介

【「描く」についての研究紹介】　　齋藤亜矢（京都造形芸術大学文明哲学研究所）

進化や発達の視点からの研究を紹介した。チンパンジーなどの大型類人猿も絵筆を渡せば絵を描くことができるが、基本的には「なぐりがき」で、何かを表した絵（表象）を描くことはない。描画テストでチンパンジーとヒト幼児の発達過程を比較すると、その背景に「ない」ものを想像する力、見立ての想像力があることが示唆された。それは言葉を持った人間の認知的な特性だと考えられる。描線にものを見立てるときに概念（表象スキーマ）が反映されるので、子どもの絵にはスキーマの発達過程があらわれる。それが頭足人やさかさまの絵など、不思議な絵が描かれる要因となる。大型類人猿にとっても「描く」は自己報酬的な行為だが、なぐりがき期の子どもと同様、入力（手を動かす）と出力（軌跡としてあらわれる描線）の関係性を探索する遊びとしてのおもしろさである。表象を描くようになると「描く」は社会的な文脈に置かれるようになり、コミュニケーションの役割が付与される。新学術「出ユーラシアの統合的人類史学」で、表現の多様性が生まれる背景について、考古学や人類学、認知科学をつなぐ描画研究をめざしており、今後コラボレーションができればと考えている。

【絵本・マンガに描かれる顔・表情】　　山本美希（筑波大学芸術系）

専門である絵本学の分野から、特に言葉のない絵本の物語表現に関する研究について発表した。20 世紀以降に作られるようになった現代の絵本では、絵が中心となって物語を表現する。言葉は説明・意味付けの役割があるのに対し、絵は個別具体的な様相をそのまま提示するものという特徴がある。絵は情報を一律に示すだけでそのどこに注目するかが受け手によって異なるため、絵だけで物語を語ることには様々な課題が伴うと考えられてきたが、絵本作家たちはそれに様々な方策を用いて対応し、物語表現を実現している。例えば、身振り、視覚記号の使用、誇張的表現、画面やページ数を費やす、対比的構成などである。また、言葉を使用しないという選択そのものにも、言語での交流が難しい存在を描くためであるといった必然性が考察でき、『アンジュール』や『アライバル』などの絵本では物語内容と表現形式との密接な関連が見られた。文字は同じ記号体系を知っている人でなければ理解できないが、絵は言葉とは異なる伝達手段であり、そこに言葉のない絵本の可能性がある。また、近年世界中で作られるようになったマンガに見られる様々な顔つきについて紹介し、各国の絵のスタイルを検討した。

４．アドバイザーからのコメント

亀井伸孝（愛知県立大学外国語学部）
（*発表内容の記録（文責：田曉潔））

アドバイザーとして登壇してくださった亀井先生は、これまでに西アフリカ諸国における手話と、ろう者の人びとの日常生活、およびカメルーンの熱帯雨林に暮らす狩猟採集民の子どもの文化と教育について、フィールド調査に基づいた文化人類学的な研究をおこなってきた。子どもを対象にした研究成果では、スケッチ・リテラシーの研究・教育手法を提起し、その視点をさらに描画を用いたフィールド調査の教育プログラムへ発展させている。

本企画の５つのフィールド報告とコメンテーターの研究紹介から、亀井先生から「描画」に関する議論における五つの課題があげられた（文化による認識のバイアス、道具使用の文化的バイアス、描画行為にかかわるバイアス、「人種」神話を支えた人々の認知のバイアス、社会調査に自ずと伴うバイアス）。それらの課題をさらに探るために、まず“ヒトとその諸文化にとって絵とはなにか”という問いを、フィールド調査に基づいた領域横断的な議論から再考する必要があるとコメントされた。

同時に、人間の歴史のなかで、文字に頼ってきた経験は短く、絵を利用したコミュニケーションを調査することは、人間社会の特徴とその変化に対する理解を深める可能性があると指摘された。そして、これからの「描画」研究の展開については、「描画と遊び、そのプロセスにおけるおもしろさ」、「異文化比較に留まらず、ヒト（及び生物）にとっての描画の意味を探る重要性」についてなど、いくつか重要なアドバイスをいただいた。

総括・今後の課題

田暁潔・大石高典

本セミナーでは、心理学、霊長類学、人類学、芸術学、認知科学の分野に属する研究者らから「描画」についての話題を集めてディスカッションを行った。話題提供者らは、アジア・アフリカ・ヨーロッパの諸地域におけるフィールド調査で観察できた「描画行為」の多様性と普遍性について、それぞれのフィールドの地域性と文化的特徴を含めて、詳細なデータを示しつつ報告した。また、コメンテーターとアドバイザーからは、絵本学、思考言語・発達心理学、文化人類学の分野におけるこれまでの「描画」研究史をふまえたコメントと、今後の研究課題と方向性について意見が述べられた。その後は主に、描画の認識と表現の人類集団における多様性と地域性、遊びを喚起する営みとしての描画行為の普遍性という二つの側面から議論を進めた。

描画への認知と描画を通した表現の多様性・地域性については、特に、タンザニア、カメルーン、ケニア、タイの各フィールドで同様のプロセスを通して実施した顔写真の描画フィールド実践の結果報告で分かり易く示された。描画実験では、まず被験者に一枚の顔写真を 10 秒見せて、画像が消えた後に見たものを紙に描いてもらった。その結果、日本とタイで収集できた絵には顔から肩までが描かれることが多かったのに対して、タンザニア、ケニア、カメルーン、つまりアフリカの調査地で収集された絵では顔だけでなく全身を描いたものが多く見られた。また、日本とタイの顔の絵には、鼻の表現には漫画的な特徴を持つものが多かったのに対して、アフリカの調査地で収集できた絵には眉鼻ラインがはっきりと描かれたものが多く、全身及び内臓まで書いた絵も一部では見られた。そのほか、描画をする際には、カメルーンとケニアでの調査では、写真にある人物に関する参加者の語りがとくに豊富だったことがわかった。例えば、参加者らは写真に出た人物の出身地や年齢、職業、家庭状況などについて研究者に聞いたり、その人物や人物が置かれている状況にまつわるストーリーを詳細に語りながら絵を 30 分以上も継続して描いたり、身振り手振りを交えて語ったりした。そのような描画実践への参加者どうしの会話や、参加者と研究者の相互行為までを含めた描画のプロセスをさらに考えていくことは、人間の「絵を描く」行為に対する理解を深めることにつながる。

ここまで述べてきたような地域的な特徴のほか、各フィールド調査の報告には共通するもう一つの特徴があった。それは絵を描く行為そのものの「おもしろさ」に対する再認識である。アジア・アフリカ・欧州で実施してきた描画フィールド調査において、描く人を始め、見る人、記録する人、その成果を聞く人など多くの人がそのおもしろさを語った。ここからは、社会的な遊びとして「描画」を捉え、相互行為の側面からその普遍性を考えてゆく可能性が提起される。これまで描画は、「表現」を行う個人による主体的な行為と

して理解されてきた。しかし、描画を社会的な構築の過程として捉えれば、描き手や描かれる対象（動物やモノであることもあるだろう）を含めたより広いアクターの間で繰り広げられる相互行為のある時点での一断面と言うこともできる。したがって、描画が行われる空間に参与する人々の会話や身ぶりを詳細に記述・分析することができれば、例えば描画に特有な相互行為の特徴とは何か、何が描画行為に「おもしろさ」を生み出し、それが「作品」に表現され、認識を通じて広い他者に共有されるのかを明らかにできるかも知れない。

今回の企画をきっかけにして、「描画行為」に関する学際的な研究グループを形成したいと考えている。これからは、それぞれの研究領域の特徴を生かしながら、本企画を通して発見できた「描画」の地域性と普遍性の二つの側面をさらに整理し、研究成果として発表しながら、その二つの側面にまつわる可能性を「描画行為」の新たな研究課題としてさらに議論を深めていく予定である。

謝辞

本企画は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・フィールドネット企画のあつい支援を受けて開催できた。フィールドネット企画の皆様，とりわけ事務局の千葉様、助教の吉田様に、事前の準備から当日の設営・進行まで多大なる協力を賜りました。また、休日にも関わらず、多くの方が多忙ななか企画に参加していただきました。登壇者をはじめ多様な背景を持つ参加者の方々から、貴重な話題と議論をいただきました。この場を借りて心より感謝を申し上げます。

企画の様子